

ネコハエトリのクモ合戦のさせ方

前川 隆敏

ネコハエトリの雄同士を闘わせる遊びは横浜市や三浦半島、房総半島に分布し、ホンチ遊びとして知られている。ホンチとはネコハエトリの雄の俗名である(川名・齊藤, 1985)。この遊びは昭和35年頃を境にいったん廃れたが、遊びの消滅を惜しむ人々が横浜ホンチ保存会を設立、その復活をのぞむ声に支えられて最近、神奈川県各地で春先恒例の行事として行われるようになってきている。

筆者は子供の頃から、さまざまな条件の下でホンチを闘わせながら、ホンチを効果的に闘わせる技術を工夫してきた。まだまだ工夫の余地はあると思うが、クモの行動学的にも重要なところが多いと思われるの

で、このたび日本蜘蛛学会の池田博明氏の勧めで、それらを紹介することにした。なお、このクモの正式な名はネコハエトリの雄であるが、本解説ではホンチという俗名を使うことにする。本方法の一部はすでに横浜市こども植物園発行の冊子(1991)でも紹介している。

1. ホンチの採集時期と生息地

横浜市内で、ホンチの採集に一番いい時期は4月の下旬である。年によって1週間から10日ほど出現のピークがずれる。1990年には4月20日頃にはたくさん見られたが、1991年には4月に入って冷え込んだためか、1週間ほど遅れた。

マサキの生け垣や植え込みに多い。

2. ホンチ箱

捕らえたホンチを入れておく箱(ホンチ箱)は、ス

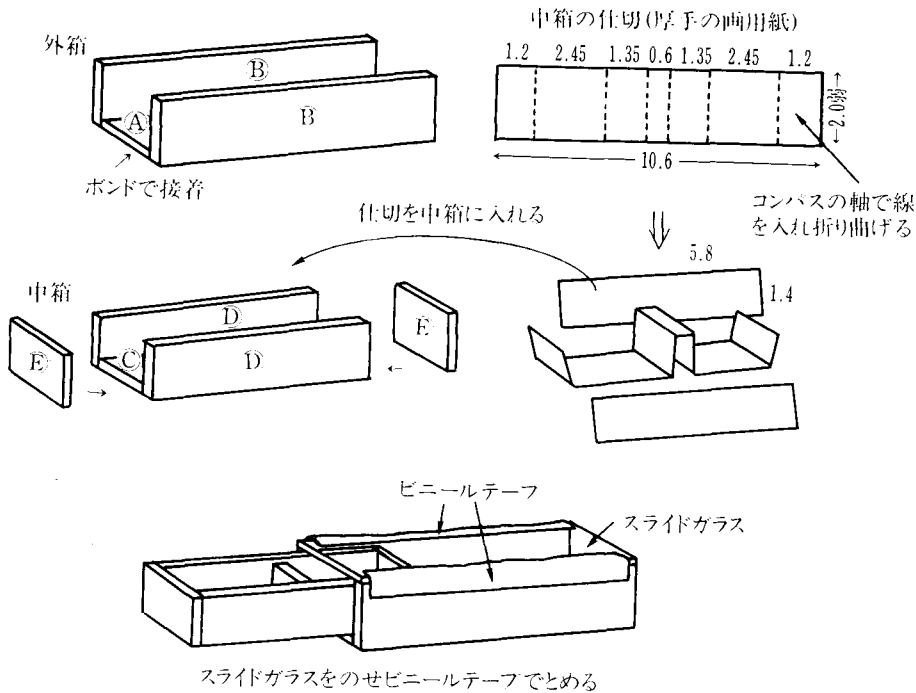


図1 (ホンチ箱の作り方)

厚さ2mmのバalsa材をカッターでそれぞれ下の大きさに切る

外箱 底板 7.5 cm x 2.6 cm 1枚 A 側板 7.5 cm x 1.9 cm 2枚 B
 中箱 底板 5.9 cm x 2.1 cm 1枚 C 側板 5.9 cm x 1.7 cm 2枚 D
 押板 2.5 cm x 1.65 cm 2枚 E

(入れ方)

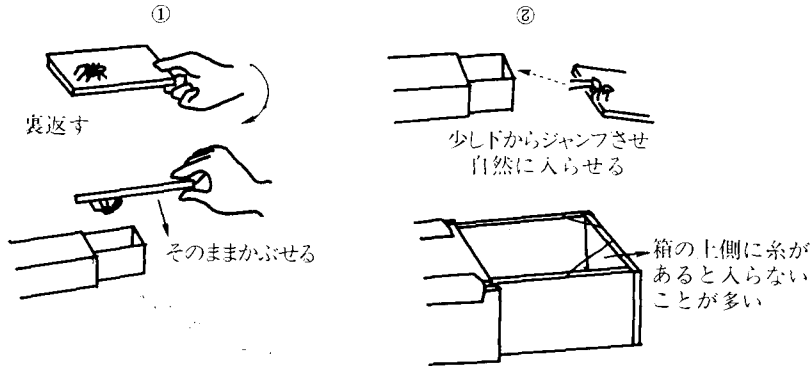


図 2

ライドガラス、バルサ、紙を利用して作る。この箱の利点は特別な材料を使わないこと、誰にでも失敗なく作れること、小型であること、クモの様子が一目で分かること、中が汚れたときの始末が容易なこと、クモの出し入れがしやすいことである(図1)。

小さなホンチ箱の中へ無理に追い込もうとしても、なかなか入らない。バルサ板かガラス板などを利用するか、自主的に入れるようにする(図2)。

ホンチ箱から出す時は指先でそっと驚かさないように押してやる(図3)。

箱から出したホンチは通常、上へ、明るい方へ、物のある方へ行く習性がある。この習性を利用してホンチを扱うようにする。何よりも驚かさないようにするのがコツである。また、弱るので、絶対に手でつかまないこと。

(出し方)



図 3

3. ホンチの飼育

餌には生きているハエや蚊などを与える。ヒメイエバエほどの大きさのものがよい。そのままホンチ箱の

中へ入れてやると、すぐにつかまえて食べる。

ハエや蚊が採れない時は、薄めの砂糖水でも代用できる。スポットでホンチ箱の中へ、飲みきれだけの分量をつけてやる。

また、ときどき水を与えてやるとよい。

4. クモ合戦(ホンチ遊び)のコツ

1) バルサ板

ホンチを闘わせるいわば土俵であるが、筆者は2枚のバルサ板を使用している(10 cm×8 cm×2 mm)。

バルサ板を片手に持ち、もう一方の手で板上にホンチを出す。空いた手にもう一枚のバルサ板を持って、別のホンチを前の板上か、新たな板上に出すのである。

ホンチは板上を歩き回るが、板を中空に支えていれば、板の外に飛び出すことはあまりない。仮に飛び出したとしても、クモの進む方向に板を出してやればまた乗っかってくる。

2枚のバルサを動かして、2頭のホンチをなるべく自然に対面させるようにし、できるだけ一枚の板上に2頭をのせてやるとよい。

2頭がケンカし始めないときでもすぐにあきらめずに、数回対面させてみる。四つに組んだ後は様子を見ながら、攻められている方にバルサ(土俵)をつけてあげる。攻めている方は腹部をビクビクさせているので判断できる(図4)。

このバルサ板の利点は軽いので長く持っても疲れないこと、ホンチを押しつぶしたりする心配がないこと、薄いのでホンチを乗せやすいこと、小型であるためホンチどうしが出会う確率が高まることである。

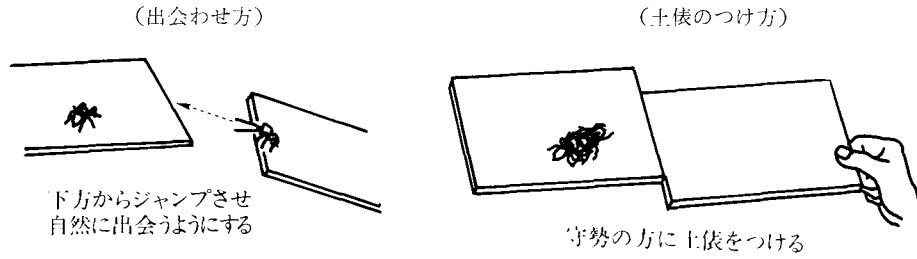


図 4

昔はホンチ箱の中で闘わせましたが、箱が小さいと咬み合って負傷するし、大きすぎると出会いの機会が薄れて、闘い始めないことが多い。適当な大きさの箱であっても、すべてうまく歩けなかったり、ホンチの出した糸がじゃまになって闘えなくなり、戦意をなくす場合がある。また、一方が逃げ回るともう一方の方も動揺し、闘わなくなるケースが多い。

ホンチの扱いに慣れてくると、オープンなところでも十分にコントロールできるようになる。

勝ち負けだけでなく、魅力的なホンチの動きを味わうためにも、オープンなところで闘わせるのが一番である。

2) 照明

日陰よりも日向の方が活発に闘う。したがって周囲にあまり人が集まって陰にならないようにしたい。照明は人工光源でもよい。

3) 合戦時の注意

空腹状態の時、相手の後ろ姿を見ると、飛びつき、咬みついてしまうので注意する。また、見ている人が大声を出したり、ホンチを指さしたりすると、ホンチは驚いて闘いを止めてしまう。

5. 闘いの行動学

1) 個体差

戦意をいつでも強く出すものと、あまり出さないものがある。

2) 他のハエトリグモとの闘い方の相違点

最も異なるところは、自分の触肢と相手の触肢をカギ状にからませ、引き付けあう点である(触肢の引きつけ)。こうすることにより相互が密着し、お互いのキパで相手を負傷させることはあまりなく、相撲のような闘いぶりになるのである。また、相手を持ち上げることがあるが、この「触肢の引きつけ」がな

いと出来ないように思う。

3) 気温による影響

15°C 程度を境に気温が低くなるほど戦意が弱くなり、闘う確率は低くなる。

4) 戦意の誘発

イ) 2頭のホンチがあまり闘わないとき、比較的新しく、やわらかい巣が張られているホンチ箱を取り、先に、より戦意のない方の1頭を自主的に箱の中に入れ、体を震わすようになったら、別な方向からもう一方を同様に入れる。両者とも体を十分震わすようになった後で、出会うようにするとよい。この時は、間仕切りのない2匹分のスペースのホンチ箱がよい。

ロ) メスを使って求愛誘示行動をさせ、興奮させた後で両者を出会わす。

ハ) 負けて問もないホンチ(Aとする)に戦意を出させるには、相手としてかなり小さめなホンチ(Bとする)を選び、2枚のバルサ板上にそれぞれを乗せ対面させた後、Aが逃げないうちにBをバルサ板ごと引き、あたかも逃げたように見せかける。これを数回繰り返すとAは戦意を出し、脚をふりあげるようになってくる。かなりやる気になってきたら、小さめの戦意の強いホンチと闘わせ、これに勝てば自信を回復する。

イ) ロ) ハ) を併用してもよい。

5) 勝者と敗者による行動の相違

勝者：一度勝つとますます闘争心を燃やし、動作もいっそう機敏になる。「ケン(第1脚)をみがく」(第2脚で第1脚をす早くこする)ことも多い。

問を置かず、5、6回連続で勝ち、興奮状態になると、相手を見ても、脚をふりあげず、正面からでも飛びついて咬みつくことがある。オス間闘争でも儀式的行動はなくなり、このような時はメスを見せても咬み

殺してしまうことが多い。

正常な状態の場合、とくに空腹でない限り、ホンチどうしが正面を向き、対面した状態では、相手に飛びつき、咬みつくことはほとんど無い。

しばらく時間を置くと、もとの状態に戻る。

たとえ負傷しても勝った場合は、弱ったしぐさをあまり見せない。

敗者：多くの場合、戦意を無くし、回復には少し時間がかかる。回復には、かなり個体差がある。

負傷して負けた場合は、いかにも弱って元気がないしぐさになる。

参考文献：

川名 興・斉藤慎一郎, 1985. クモの合戦, 238 pp.

未来社, 東京.

斉藤慎一郎・佐藤芳夫・前川隆敏ほか, 1991. 横浜の自然とホンチあそびの研究. 28 pp. 横浜市こども植物園.

(神奈川県横浜市西区中央2-51-12)

国際動物命名委員会会報より

小野 展嗣

本誌 95 号 46~47 頁所載以降に The Bulletin of Zoological Nomenclature に掲載された本会関係の記事は以下の通りである。

尚、国際動物命名委員会についての説明は本誌 86 号の 19 頁にあるので参照されたい。

46 巻 4 号 (1989 年 12 月 19 日発行)

[提訴]

S. A. STOCKWELL & H. W. LEVI: *Buthus vittatus* (currently *Centruroides vittatus*; Arachnida, Scorpionida): proposed recognition of WOOD (1863) as author of the specific name and designation of a neotype, and *Centrurus hentzi* (currently *Centruroides hentzi*) BANKS, 1904: proposed conservation of the specific name.

[Official Lists (L) および Official Indexes (I) に登録された学名]

Family-group name:

Cheliferidae WESTWOOD, 1838 (L) [Opinion

1542]

Generic names:

Aceria KEIFER, 1944 (L) [Opinion 1521]

Chelififer GEOFFROY, 1762 (L) [Opinion 1542]

Colomerus NEWKIRK et KEIFER, 1971 (L) [Opinion 1521]

Eriophyes VON SIEBOLD, 1851 (L) [Opinion 1521]

Phytoptus DUJARDIN, 1851 (L) [Opinion 1521]

Specific names:

avellanae, *Phytoptus*, NALEPA, 1889 (L) [Opinion 1521]

cancroides, *Acarus*, LINNAEUS, 1758 (L) [Opinion 1542]

coryli, *Phytoptus*, FRAUENFELD, 1865 (I) [Opinion 1521]

coryligallarum, *Phytoptus*, TARGIONI-TOZZETTI, 1885 (I) [Opinion 1521]

gardeniella, *Eriophyes*, KEIFFER, 1964 (L) [Opinion 1521]

pseudogallarum, *Acarus*, VALLOT, 1836 (I) [Opinion 1521]

pyri, *Phytoptus*, PAGENSTECHE, 1857 (L) [Opinion 1521]

tulipae, *Eriophyes*, KEIFER, 1938 (L) [Opinion 1521]

47 巻 1 号 (1990 年 3 月 27 日発行)

[提訴]

M. S. HARVEY: *Mirochernes* BEIER, 1930 (Arachnida, Pseudoscorpionida): proposed confirmation of *Chelanops dentatus* BANKS, 1895 as the type species.

R. B. HALLIDAY: *Holostaspis subbadius* var. *robustus* BERLESE, 1904 (currently *Macrocheles robustulus*; Arachnida, Acarina): proposed conservation as the correct spelling of the specific name.

47 巻 2 号 (1990 年 6 月 29 日発行)

[論評]

R. J. RAVEN: Comment on the proposed precedence of *Aphonopelma* POCKOCK, 1901 (Arachnida, Araneae) over *Rhechostica* SIMON, 1892.